

ハイネとハンブルク

大澤 慶子

このたび2月と3月の8週間、ハンブルクのサブセンターで仕事をさせていただけることになった。この機会に、若い頃から気にかかっていたのに手をつけずにいたテーマをとりあげて研究してきたと考えている。

そのテーマというのは、若いハイネ (Heinrich Heine 1797 - 1856) の恋愛体験と当時の彼の抒情詩との関係である。もちろん作品となった詩は、詩人の体験からのみ解釈されるべきでないし、そのように読む必要もないであろう。しかしながら、ハイネの初期抒情詩のような短詩にあつては、詩の生まれた環境を知ることが、詩を理解する上で欠かせない条件のように思われる。作品をどのように読もうとそれは読者の自由であるが、私としてはやはり詩の生まれた風景の中でその詩を追体験してみたいという願いを諦められないでいた。ちょうどそこへ、今回出張のお話があり、ゆかりの都市ハンブルクで遅まきながら詩人的出発の跡を訪ねようと考えたのである。もっとも私の研究方法では、実証的に恋愛その他の生活体験を跡づけるというよりも、体験から生まれた作品世界のモチーフやテーマ圏の文学的な諸関係を考察するつもりである。

ハイネは現在でもドイツで富裕な都市と言われるデュッセルドルフ市街地の生まれである。父方の祖父はハノーファーの裕福な商人だったが、その死後妻（詩人の祖母）は実家のあるハンブルクに戻った。詩人の父はここで生まれ、各地を転々としたあと、デュッセルドルフに落ち着いた。詩人に経済的援助をしてくれた叔父

ザーロモンはハンブルクの銀行家であった。母はデュッセルドルフに17世紀から続く銀行家や学者を輩出した名家の出身である。このようにハイネは家系的にドイツの大都市と深い縁があるが、彼自身も1817年から19年にかけてフランクフルト・アム・マインとハンブルクで商人修業をしたり、ベルリン大学に在籍したり（1821 - 23年）、1831年からの後半生をパリで送ったりと、基本的に大都市で生きた。詩人として本格的に出発するのは、1827年の『歌の本』*Buch der Lieder*の成功からである。

ハイネが根っからの都会人であることは上述のとおりだが、その後も都会に住みつづけたのは、19世紀前半のヨーロッパで資本主義が成熟し、文学が商品化されたことと無関係ではない。彼はつねに「売れる本」を意識して書きつづけた。わが国の文学者の状況を見ても、ファクスや電子メールなどで情報のやりとりが瞬時にできるようになってからは東京以外の地に住む作家も珍しくないが、それ以前には出版産業の集中する東京周辺に住むことが当然視されていた。ハイネも都市に住み、都市生活の中で文学を通じて人間存在のありようを検証しつづけたと言えるのではないか、というのが今回の私の作業仮説である。これを生涯全体にわたって見通すには時間も力も及ばないので、今回はとりあえず出発点のハンブルクから始めようと思う。

それでは若い詩人（の卵）にとって、ハンブルクとはどんな都市だったのか。

1816年春、ザーロモン・ハイネに同行して

デュッセルドルフを訪れたその娘アマーリエ・ハイネに、従兄にあたるハリー（詩人の少年期の名前）は一目ぼれをした。その後ハリーはハンプルクへ行って、叔父の援助で店を開くがすぐ倒産させてしまう。実際家の叔父は、文学にしか興味がなく商才に乏しい甥を娘の婿にしようとはしない。アマーリエ自身もハリーには関心を持たなかったようである。こうして必然的に失恋の詩が生まれることになる。『歌の本』の初めのほうに置かれた「若い悩み」のうちの「歌」5番はハンプルクを歌っている。

ぼくの悩みを育てた美しいゆりかご、
ぼくの平穏を埋めた美しい墓標、
美しい町よ、ぼくらは別れなければならない—
さようなら、とぼくはおまえに呼びかける。

さようなら、神聖な敷居よ、
それはいとしいあの人があそこ。
さようなら。ぼくが初めてあの人に会った
神聖な場所よ。

ぼくの心の美しい女王よ、
もしも君に会っていなければ、
今こんなにみじめなありさまには
なっていなかっただろうに。

ぼくは決して君の心を動かそうなどとは
思わなかった、
愛してほしいと願ったりもしなかった。
ただ、君の息吹の通うところで、
静かに生きていたかっただけだ。
しかし君はみずからぼくを追い立てる、
容赦ないことばを君の唇は語る。

ぼくの感官には狂気が渦巻き、
心は病んで傷ついている。

そしてだるく力ない四肢を引きずって
杖にすがってぼくは去ってゆく。

ぼくの疲れた頭を
遠くの冷たい墓に横たえるまで。

ブリークレープ（Klaus Briegleb）は、この詩群の基本テーマを「愛（永遠の恋人）、自由、ポエジーと死」と見ているが、それはこの作品にもよくあてはまる。愛するものに受け容れられない悲しみ、帰属できない悲哀は、裏返せば自由ということでもある。大都市の中で帰属するところを持たずに旅に出て行く、という図式は、ドイツ社会の中で、ユダヤ人として生まれたためにしかるべき職業に就くこともできない、アウトサイダーの自由と悲しみを表現しているとも解釈できる。彼が恋したのは、美しい従妹だけではなく、「君の息吹の通うところで静かに生きる」ことのできる安定した居場所、この現実世界でもあった。それが実現不可能に見えるとき、詩人は死に憧れる。このモチーフはノヴァーリスの『夜への賛歌』を初めとするロマン主義文学の影響から来ていると考えられるが、まだ現在検証中である。

ハイネの恋愛詩はこのように、体験を反映しながらも社会的背景を感じさせるように重層的に書かれている。後期のハイネは内容的にもさらに視野を広げて社会性や時事性の強い詩を書くようになるが、初期恋愛詩にもその萌芽はじゅうぶんに含まれていると言えるのではないか。